

2004年5月、アフガニスタンを訪ねた伊沢理事は、「カンダハル市緊急復興支援調査」で再建されたマラライ女子校の引き渡し式典に出席した



中東地域の課題

「中東」というと、一般的にはサウジアラビアなど産油国のイメージがあると思いますが、JICAが対象とする中東地域はもっと広く、アフガニスタンやトルコ、チュニジア、モロッコなども含まれ、産油国のように比較的所得が高い国もあれば、まだまだ貧しい国もあります。一つの国の中でも超近代的な都市がある一方で、地方は貧困にあえいでいるなど、大きな格差もあります。

ただ、総じて情勢が非常に不安定です。それにはいろいろな理由がありますが、

一つは長い間天然資源に過度に依存し、産業が未熟な中で人口が増加し、特に若年層で失業者が増えている問題があげられます。民主化が進み、西欧的な価値観が広がる中で個人の自由が制限されていることへの不満が高まり、社会が不安定になりやすい状況です。その上、9・11以後はテロ撲滅のための闘いが本格化しています。

中東地域は、石油資源を中心に非常に重要なエネルギー資源の供給地であり、また、パレスチナ和平は国際的な課題でもあることから、こうした中東地域のさまざまな問題の解決に協力し、安定化に貢献していくことは、日本だけでなく世界全体にとって大変意味のあることなのです。

わたしの視点

from JICA Leaders



(上)新しい校舎で教育を受けられるようになったマラライ女子校の生徒たち(アフガニスタン)
(下)ヨルダンの首都アンマンで行われたイラク人を対象にした水管理研修の様子(撮影:沼田早苗)。ヨルダンやエジプトでは、医療、司法、電気技術、文化遺産などさまざまな分野でイラク、パレスチナを対象にした第三国研修が実施されている

JICA理事

伊沢 正

Izawa Tadashi



世界の課題 「中東和平」実現に 貢献する支援を

テロや戦闘が頻発し、治安が不安定なパレスチナ、アフガニスタンやイラクをはじめ、中東地域で援助を行うことは容易ではない。JICAはそうした状況を踏まえてどのように事業を展開しているのか、伊沢正理事に聞く。

不安定な治安の中での工夫

ではJICAがどんな支援に重点を置いているかというと、中東和平実現のためのパレスチナの平和構築と、アフガニスタンとイラクの復興開発です。同時に、地域全体の共通の課題として、水資源、若年失業者の雇用対策、地方の貧困削減、環境保全に力を入れています。

しかし、安全の確保と事業の効率的実施のジレンマは頭痛の種です。JICAの人づくりや制度づくりの協力は、現場で継続的に行うことが必要ですが、治安が不安定なためにアフガニスタンやパレスチナではたびたび退避を余儀なくされ、イラクにいたっては中に入れないのが現状です。

その中でより効率的、効果的に援助するにはどうすればいいのか。一つは、JICAの研修を受けて帰国した研修員やナショナルスタッフの協力を得て、日本人が一時的に現場にいらなくても事業が進むようにしたり、また、平和構築には迅速な対応が求められることから、「ファスト・トラック制度」を活用した短期間のスムーズな支援も心がけています。

さらに、日本で行う研修のほか、ヨルダンやエジプトなどJICAが支援してきた周辺国のリソースを活用した、南米協力の専門家育成も行っています。例えば、エジプトの小児病院を活用してイラクの医療関係者の研修を、電力分野の協力が進んでいるヨルダンでは電力技術

者の研修などを行っています。また、中東和平については地域全体の最重要課題でもあるので、地域の力をもとに共同で支援していくことが大切です。

もう一つの課題は、近年JICA全体として人員や予算が削減傾向にある中で、中東地域も当然、限られたリソースで効率的な事業の実施が求められていることです。そこで、地域支援事務所のない中東では、ある国に派遣されている専門家が同分野で周辺国の支援も行うなど、広域的なアプローチを進めています。

また、現場強化の方針の下、本部の権限を在外事務所に移して、現場の責任、権限で事業を行う範囲が広がっていることもあって、現場レベルのモチベーションが高まっています。事務所からさまざまなアイデアがあがってきますし、もっと積極的にやりたいといった声も多く、そうした意欲には敬意を表します。しかし、無理をせず、何よりも自らの安全にも十分注意してやってほしいと思います。

特にイラクやパレスチナ、アフガニスタンは日々状況が変わります。現地のスタッフにとっては、生活環境が厳しく、自由に動くこともままならない難しい状況ですが、人間の安全保障を念頭に置き、できる範囲内で人々に直接裨益する支援をやるといふ意識を持って取り組むことが大事だと思います。

平和構築支援や大規模自然災害への支援など緊急性の高い事業を、簡素化された手続きなどにより、迅速に計画・実施する制度

アフガニスタンで現場の大変さを実感

2年前に訪れたアフガニスタンでは、カブールの復興が急速に進み、都市化の弊害が発生していました。一方、カンダハルではホテルがなく、国連の宿泊施設に泊まりました。そのときひどい下痢になり、高熱も出て夜中苦しんだのですが、医療機関がないのでカブールに戻ることにしました。しかし、米軍の飛行場を使っているため、建物もなく、便も不定期で、長時間炎天下で待たなければなりません。カブールで治療を受けてすぐ回復しましたが、医療機関やインフラのない地で生きることを実感し、わずかなりとも体験しました。また、移動はすべて防弾車で、護衛も付きます。専門家や職員は

毎日そういう形で行動が制約される中で活動しなければならないので、非常に厳しい。

カンダハルの女子校では、ある生徒が目を見ながら「どうしたら日本に留学できるのか」と聞くのです。タリバン政権時代には女子教育がほとんど行われていなかったのですが、勉学の意欲があっても、機会が与えられない子どもがたくさんいたのだと改めて実感しました。

現場を見て、その国のすべてが分かるわけではないですが、ニーズや課題、活動の大変さが実感でき、イメージができたものになります。東京で議論するときは、それらを踏まえることが大切だと思いますね。